

M24. 8. 27

京都新聞

第3種郵便物認可

京

者

業

学生デザインで 海外貧困層 国内障害者 支援

下京のNPO・京都造形芸大タッグ



河西さん(左)から「アバカ」の説明を聞く学生たち
—京都市左京区・京都造形芸術大

海外の貧困層と国内の障害者の支援を目指し、フィリピン特産の繊維「アバカ」を使ったフェアトレード製品作りに、京都市下京区のNPO法人「フェア・プラス」と京都造形芸術大の学生が取り組んでいる。現地の住民が繊維を加工し、日本の障害者施設で製品に仕上げるビジネスモデルを構想し、製品開発に知恵を絞る。企画した同法人の河西実事務局長(60)は「デザインによって商品価値を高め、自立支援につなげたい」と期待する。

フェアトレード製品開発

河西さんは商社勤務時代に途上国の貧困を目的に退社後、2年前に心筋梗塞で倒れて障害者手帳の交付を受け、障害者にも関心を抱いた。「連携することでより良い支援ができるのでは」と企画し、学生の力を得ようと同大学に提案した。

河西さんは商社勤務時代の製品を考えると、現地の住民が加工でき、日本の障害者施設でも作れる製品が求められる。5月から開く隔週授業では「フェアトレードとは何か」の討論から始めた。参加する4年外灘香織さん(22)は「外国から日本を見つめ直してみたい。一時のブームで終わらず、継続できるものを作ることが大切」と力を込める。今後は素材研究や現地視察をし、本年度中の製品完成を目指す。(逸見祐介)

アバカはバナナに似た多年生植物。木から採れる繊維は柔軟だが強い。現地ではサンダルやランチョンマットが作られているほか、欧米デザイナーが注目して帽子などにも使われているという。プロジェクトでは、学生ならではの発想で市場に受け入れられるデザイン

フェアトレードは世界各地の商品を適正な価格で買うことで、開発途上国の生産者や労働者に正当な賃金を払い、生活水準を上げていく取り組み。



フィリピン特産の繊維「アバカ」(手前)と「アバカ」を使ったサンダルやランチョンマット、人形などの製品